

表現としての政治、政治としての表現

「文學者の文學的責任」をめぐるつて

倉井 香矛哉

謹啓 此は敗殘兵の辯明なんぞでは無い。僕自身としては、自分の事を字義通りの負け犬だとは少しも考へてゐないのだから。無論、今日の僕に對する君の印象に就いては識る由もあるまい。過去に少なからず交流を持つた相手の裡に、もう一人の・別の個の「僕」と云ふ人格が潜んでゐる。——そのやうな想像は、徒らに僕を混亂させるだけだ。

さて、具體的な内容を書き進めないうちに、先づ、此處で斷つておきたい。僕の筆致は、事實關係の説明と云ふよりも寧ろ、默示的な、或いは預言的な性質を帯びてゐるのだ。一體、以下に記す内容は、君が爲にも頗る奇妙なものに感ぜられるであらう。一人の書き手としての僕自身の人格は、懼らくは、二重にも、三重にも、破綻を來してゐるやうに見へるであらう。別段、君が信じて呉れずとも善い。嘗て、君は指摘してゐた。僕自身の自己規定を根柢から脅かしかねない、或る矛盾をめぐつて。彼の時、君の指摘した事は正鵠を射てゐやう。母方の家系の來歴ばかりを強調する僕の語りは、その操作と引き換へに、父親と其の一族のイメエジを抑壓した儘顕在化せしめると云ふ自己否定の契機を孕んでゐる。其と同時に、君は、僕自身の語りに胚胎する今一つの虚言に氣を附けた方が好い。僕の「福岡藩士」を語る、——或いは、騙ることの動機は、畢竟、其處は僕自身の出自に完く何の關係も有たない、という一點にある。語り傳へられる處に據れば、僕の母方は熊本^の庄屋と武家の末裔であるし、父方は隠れキリシタンの外來性を内包する生まれだ。然し乍ら、其自體は然したる重要性を有たない。其は専ら、母方の一族に於ける情緒的連帶の機能としての物語に他ならない。其處に精神的な遺風のやうなものはあるのかも識れないが、「お國柄」だとか、「民族性」だとか、或いは「血筋」だとか、さうした決定論的な物言ひに就いては、僕は一切排除して了ひたいのだ。御存知のやうに、僕の公稱としての血液型は「A型」と云ふ事に爲つてゐる。是も全く同様の事で、僕は、自分自身の身體中の血液をすら誰か別の他人のものに入れ替へて了ひたい。——所詮、其のレベルの與太話に過ぎない。

今一つ、説明しておかなくてはならぬ事が有る。即ち、僕自身の性自認、性指向、性表現、すなはち、「男装の女傑」としての自己規定をめぐつて。其は亦、非性愛の傾向を強調することを媒介として、父權的なもの、あるいは自分自身が父權的な行爲主體として振る舞ふ事からの逃避であるかのやうな印象をさへ與へもするだらう。亦、斯様な傾向が、偶々僕の周圍に居